

## 授業を生徒にとって魅力的なものに —— 絵巻物で討論授業を ——

千葉県立千城台高等学校

加藤 公明

(008)高校日本史A新訂版

(013)高校日本史B新訂版 執筆者

### 絵巻物のストーリーを予想する

実教出版『高校日本史B 改訂版』に掲載されている「テーマ学習 絵巻物に登場する中世の女性たち」(p.96)をご覧になって、あれっと思われた方も多いのではないのでしょうか。というのも、多くの教科書や図説などで鎌倉時代の借上(金融業者)の姿とされる、『山王靈験記絵巻』の縁側に跪く男性【図①】が実は借上ではなく、本物の借上は別の場面【図③～⑤】に描かれている剃髪の出家姿の人物(入道)だとしているからです。そのことはこの場面の詞書に「鎌倉の小町といふ所に廻旋する入道のありけるに甘貫の用途をそ借たり」とあることから確かめられるのですが、跪いている男性は借上の下人で、借り手の女房(貴族階級の女性)に借銭の20貫を届けているシーンだったのです(拙稿「教材選択の基準についてー借上の図像をめぐってー」日本社会科教育学会『社会科教育研究』102号 2007年12月)。

ということは、この場面だけをとりあげて、縁側に跪く男性が借上だとする、従来よく授業でなされていた説明は誤りだったということになります。しかし、『山王靈験記絵巻』が借上の営業実態や借り手の階層、借銭に至る理由を示す貴重な史料であることに変わ

りはありません。この場面だけでなく、絵巻の画面全体(図①～⑤)をつかって鎌倉時代の貨幣経済の発達とその社会を生徒が考える討論授業が展開できないかと試みたのが、今回紹介する実践です。

3年文系クラスの授業(4単位の日本史B)ですが、まず、隣同士で机を付けさせ、2人一組のペアを作らせました。次いで、『山王靈験記絵巻』を5つの場面に分けて順不同にA～Eの画面番号を付けた5枚のカラーコピーを各ペアに渡し、2人で協力して以下の問題1から取り組むよう指示しました。

**【問題1】** この絵のなかに借上(鎌倉時代の金融業者)が一人描かれています。だれだと思いますか。画面番号と似顔絵、そう考えた理由を書きなさい。

この発問の目的は、生徒に教材の『山王靈験記絵巻』の各画面をじっくり自分たちの目で観察させることです。そして、画面A～Cに描かれている入道こそが借上であることを告げて、問題2に進ませます。

**【問題2】** 画面A～Eを正しい順番に並び替えなさい。そしてあなたたちが予想した物語の粗筋をのべなさい。

図① 画面D

図② 画面E

しばらく考えさせた後に、Dが最初の画面であることを告げ、つぎのような解説をしました。

「鎌倉幕府第4代將軍藤原頼経の時代に、裁判のために京都から鎌倉に下ってきた女房、つまり貴族階級の女性がいた。ところが、彼女、裁判費用や滞在費が足りなくなったんだろう。鎌倉の小町というところで金融業を営んでいる借上の入道から20貫の銭を借りることにした。画面は、その銭が緡の状態<sup>さし</sup>で借上の下人によって届けられた場面だ。さて、続きはどうなるかな。」

1月末の学年末試験で、1年間で最も印象深い授業をあげよというアンケートを実施しています。この授業のこの問いをペアーであれこれ考えたこととする生徒が、この年は何人もいました。これまでの授業で知り得た情報や様々な知識をもとに、画面を読み取り、絵巻物のストーリーを2人で協力しながら想像するのは、生徒にとってことの外楽しい作業だったようです。

しかし、正解の「D→E→A→B→C」を答えられるペアーは多くありません。生徒たちの答えは「D→A→C→B→E」などで、想像したストーリーは「お金を借りた。お金を返せと言ってこられ、返せないと言ったら、いろいろな物や女の人が連れて行かれた。残された人は悲しんでいる」など、Bを取り立てた品物を借上が持ち去るシーンと解釈するものが多く、生徒たちには金融業者といえは借金取りというイメージが強いことが分かります。しかし、彼らも確信をもって答えを予想したわけではありません。むしろ、答えを考えるうちに、多くの疑問や矛盾を発見していったのですが、正解の順番とストーリーの「粗筋」が示されると、それらの疑問や矛盾の多くが解消され、生徒たちの画像解釈はより精密になり深まっていったのです。「粗筋」のプリントでは、Dについての先述したような説明に続き、女房が裁判を起こした理由を「( )」に所領を

侵害された」ためとし、以後の画面を以下のように説明しました。

**【画面E】** 女房は借金返済のめどがたたず、利子がたまって80貫に達してしまっ。もはや進退きわまってしまい、つかえていた下人が10人ほどいたのを、借金のかたに取られてしまう事になった。嘆かわしいかぎりである。親の代からつかえている譜代の者や、一つ二つの頃からしこんだ者もいて、行き先もわからず、はなればなれになるのは、たがいにまことに忍びない。(中略) 主人と下人とはいっても、長年生活をともにしているだけに、彼らの嘆きは深く、別れる前にせめて日ごろ信仰している日吉神社に参詣しようと言う事になった。名越の地に同社を勧請した山王堂があったので、全員で参詣し、来世でふたたび縁をむすぶ事を祈ったのである。

**【画面A】** このころ借上の入道の娘が病気にかかった。この娘が神のお告げをうけて、かの女房の借金を今すぐ帳消しにせよと言う。借上夫婦は女房の証文をさがそうと、多くの借錢証文を綴じたものをもち出して調べはじめた。すると、娘が証文の束をとりあげ、たくさんの中からただちに目的の文書をえらび出した。そして、病気はびたっと治まったのである。

**【画面BおよびC】** 日吉山王の神が心にかけておられる方を責め立てて、借金を取り立てようとしたのはまことに申し訳なかったと借上夫婦は反省し、80貫の証文を破棄するだけでなく、女房に衣裳や酒肴なども贈った。

「山王靈験記絵巻」和泉市久保惣記念美術館蔵

図④ 画面B

図③ 画面A

図⑤ 画面C

**【問題3】** 粗筋の説明文のなかの（ ）に入るべき語句はなにか。また、「（ ）に所領を侵害された」とは、具体的にどのような事か。

問題3の答えが「地頭」であることを確認し、次いで「地頭請」や「下地中分」など、荘園の支配権をめぐる武士と荘園領主＝貴族階級との抗争が頻発していたことを、教科書（実教出版『高校日本史B』p.62）の記事で確認させました。この絵巻物の物語が成立した時代背景を理解させることがこの発問のねらいです。

そして、次に問題4をペアーで10分ほど考えさせた後、答えを発表させました。

**【問題4】** 『山王霊験記』絵巻の各場面やストーリーについて、へんだなあ、なぜだ？ など、疑問に思った事を上げなさい。

### 下人は奴隷か 生徒の歴史認識はどのように発達したか

「なんで女房は物じゃなくて人（下人や下女）を借上への借金返済のために（担保として）売ったのか？」

問題4に対する答えとして出された疑問の一つです。現代の日本に生活している生徒の生活感覚では、人間を担保に借金をする、ないしは借金のかたに人間を売り渡すなどということはありません。生徒にとって意外な事実だったわけです。

生徒が、歴史を主体的に考えようとするには、彼らのこれまでの常識では説明のつかない意外な事実との出会いが必要です。そんな事実を知れば誰もが「じゃ、本当はどうなんだ」とか「どうして、そうなんだ」と、自分が納得できるまで答えを考えたくります。歴史認識の主体が立ち上がってくる瞬間です。

したがって、そのような事実遭遇させることが、生徒が主体的に考える授業を成立させるために、教師が行う第一の仕事ということになるのですが、そういう問題ならば、自分でなにか答えを考えつくと、みんなに聞いてもらいたくなる。でも、そのまま発言を許すと、一部の発言力や能力のある生徒たちだけの討論になってしまう。まずは、各自に自分の意見を作らせ文章化させることが肝要です。それをもとに討論を組織すれば、生徒全員が自分の意見をもって参加することになり、討論はクラス全体のもの

となります。今回はそれらをもとに、私が発行している「日本史通信」を使つての紙上討論です。

下人という存在について調べた。

「下人・所従は武士の直営地の耕作に従う下層農民」（図説 p.92）

「下人・所従などの隷属農民に耕作させた」（教科書 p.62）

下人＝賤民ならば、図説 p.63 〈3〉『身分制度』に官有の賤民と私有の賤民は売買の対象になる場合もあったとある。下人がこういう存在ならば奴隷と同じような存在だった??ということになり、今の時代のように人権なんてものは一切なかったと思うので、「担保にする」ということも許されたのだと思う。 (S)

Sは図説や教科書の記事に示された下人らのあり方に、律令制下の賤民との共通点（奴隷的存在）を見だし、それが彼らが売買されたり担保とされた理由と考えたのです。たいていの高校生にとって、日本史の教科書や図説などの文章は、振り仮名も多く付されていて、文字面を読むことは比較的容易です。しかし、それが歴史上どのような意味や価値があるのかを読み取ることはきわめて難しい。ましてや、古代と中世に時代が別れている賤民と下人の記述について、関係づけて理解することは至難のことと言えます。しかし、提起された問題がぜひとも自分が納得できる答えを得たいと思える魅力的なものであれば、生徒は必死になって、少しでもヒントになるような記述はないかという意識で、教科書や図説などに目を通していきます。その結果、今までは何気なく読み飛ばしていた記事のなかに、が然意味をもつものが現れ、それら相互の関連性も見えてくるのです。Sの意見はそのような彼女の探究活動の成果であるわけです。

この意見に触発されて、続いて次のような意見が表明されました。

賛成。私も同じように考えた。もし物だけだったら、その場だけの収入になってしまうが、人が担保であれば、労働力もあるので、その人が死ぬまで使うことができる。それに、今まで自分がやったことも、下人などがやってくれば楽になるから。 (K)

下人の価値は労働力にあるとする意見です。しかし、この時代の身分制には別の側面もあったことを生徒たちは、下のような議論を通して理解してきました。テーマは、「それでは、下人らは奴隷と同様、まったく『物』と同じ存在だったか」です。

「奴隷は人権などなく、(主人に)いいように扱われていた」ということは長い歴史で近年までつづいていた事実だと思います。しかし、山王靈験記絵巻に見られるように、奴隷と呼ばれる身分のすべての人々が皆不当な扱いを受けていたとは考えられません。

ジャンルが日本史と違ってしまうのですが、この間、古典で習った『更級日記』では、作者の菅原孝標女は幼少時代親しかった乳母などの死が続いたことでひどく落ち込んだらしいので、このような文献からも、主人とそれに仕えていた人々との関係が伺えると思います。つまり、この『山王靈験記』みたいに家族のような絆のあった主人と下人・下女もいたのです。しかし、多くの奴隷が人とは思われないような扱いをうけていたということは、さまざまな資料が証明しています。(A)

財産とされながらも、下人らには「物」とは違う側面、つまり人間であることから生ずる掛け替えのなさ(実存性)があったことに、Aは気づいたのです。この意見を受けて、だからこそ、物を担保にして取られてしまったら、その物でなくとも同じ種類の物を買えばいいが、人はそうはいかないので、借り手は懸命に返済しようとする。その点こそが貸し手にとっての、「物」とは違う下人らの担保としての有効性であったとする生徒もいました。

総じて言えば、この討論を通じて生徒たちは人間が歴史的にどのような存在であったのかを探究したのです。そして、日本の中世の下人について、その二面性を理解していった。つまり、一面では彼らは主人に隷属する財産として扱われているが、他面では主人と人格的に結びついており、あたかも家族の一員のようなでもあったということです。このことは、そのような身分制の社会を史的前提として成立した現代日本の社会がいかなる特性と課題を持っているかを生徒が理解する貴重な知的土台となるはずです。つまり、たとえば、サービス残業が日常化し過労死

が跡を絶たない現状について、その原因は、労働者本人の自己実現や幸福追究のためという労働本来の目的が放擲されていることと、にもかかわらず、企業への帰属意識や経営者(上司)への依存関係などがそのことを隠蔽しているためであり、それは、中世の下人の二面性が日本人(社会)の労働観として克服されていないためである、と生徒が分析できるようになる、その基となる知識を生徒はこの討論で獲得したのではないかと考えるわけです。

## おわりに

教材とは、一般に教師が策定した教育内容(教えたこと、考えさせたいこと)を生徒の学習活動(学びたいこと、考えたいこと)に結びつける架け橋となるべきものとされています。むろん、それはその通りなのですが、架け橋であるならば、一方交通的に教師の意図を生徒に伝えるではなく、生徒の疑問や意見を教師に伝える役割も果たさなければなりません。つまり、生徒がその教材に取り組むことで発見した疑問や生徒なりの解釈や仮説を受けて、教師がそれらをもとに授業の新たな展開を作り出していく。その媒介としての役割も教材は果たすべきだと思うのです。そうすることによって、授業は、生徒の興味・関心・問題意識にそった歴史探究の場となり、彼らの歴史認識を発達させ、歴史意識の覚醒・強化を実現していくと思うからです。日本独自の美術作品とされる絵巻物はそのような教材の宝庫といえます。今後も教材化の努力を続けたいと思います。

また、生徒が歴史を主体的に学ぼうとする時、自分の意見や考えを発表し、仲間からの疑問や批判、賛成意見や付け足しを受け、それをもとに自分の意見や考え方を修正・発展させる討論授業は貴重な教育の機会となると私は考えています。どうしても独りよがり視野が偏りがちな高校生にとって、他者の視点からは自説がどのように評価されるのかを知ることは、その観点から自説を反省し、あらたな調査や思考を促します。そうして、彼らの歴史認識は発展し、同時に彼らの歴史認識の能力も鍛えられていきます。生徒を歴史認識の主体として成長させるという、歴史教育の本来の目的を実現するために討論は有効な方法といえないでしょうか。